

六尺

〔梅園日記^四〕ろくろくはやく
ろくろくはやくは、力者を訛れる也。

〔醒睡笑^二〕謂被謂物之由來

京にて乗物をかき、あるひは庭にてはたらくおとこを、六尺とはなどいふならん、さる事候、屋敷につき、家につきた、みに付、一切豎横間をさだむるに、田舎のは一間を六尺にとる法なり、都のは間尺を六尺三寸にとつて、一間とする法なり、されば亭主をば、都六尺三寸の間にとり、つかはる、男をば、田舎六尺の間にとる、其故は、主人たる人の心と、下男の心と、ものごと、はらりとちがひて、まにあはぬゆへに、かの下人を六尺とはいふとなり、

〔南嶺子^三〕さてのり物かく人を、六尺といふ事、史記秦始皇本紀に、秦は水徳を以王たる故、六の數を用ゆ、輿は六尺と見たり、然るに六尺の字に、輓輶などいふ文字をつかふ人は、史記の文を考ざるが故か、

〔續視聽草^{初集十}〕乗物名目

一當時公家ノ方ニテハ、乗物ト云ハズ、輿ト云ヒ、肩ニ荷擔トモ云ヘリ、六尺夫ノコトヲ、輿ノ者、又輿舁ト云ヘリ、是ハ各古言ノ殘リタルニテ、最殊勝也、

一或人云、今乗物ヲ舁人ヲ陸尺ト云ハ、秦ノ世ノ輿ハ、六尺ト云ヨリ起レル成ベシ、曰、始皇本紀ニ曰、數以六爲紀、符漆冠皆六寸、而輿六尺、六尺爲步、乘六馬ト云々、是秦ハ周ニツギテ、天下ヲ得タル故、水徳ヲ以テ、周ノ火徳ニ代ルノ義ナリ、爰ニ輿ハ六尺トアルニヨテ、輿ヲ役スル夫ヲ六尺ノ者ト云フナラント、又云、乗物ノ柄一丈二尺ナルユヘ、各六尺ヲ持シテ舁ニ因テ、六尺ト名ヅクト云リ、又六字モ普通ニハ陸尺ト書也、各六ツカシキ考也、予^{〇大塚}思ハ、輿ヲ舁モノハ、人體ノ長大ナルヲ可トスルユヘ、六尺ノ夫ヲエラシメ用ルユヘ、世ニ長大ナル人ヲ斥テ六尺男ト